

福祉社会学の守備範囲は広い

徳田克己

心身障害学系助教授

隙間を埋める福祉社会学

私たちが専門にしている福祉社会学の守備範囲は広く、「何でもあり」の領域である。広義に福祉をとらえると、すべての人間が含まれる。現在は人間だけではなく、生きものすべてに福祉があるととらえる考え方もある。また当然であるが、人間であるがゆえに「社会」で生きている。そのつながりを研究するのが福祉社会学である。

全国でも数少ない福祉社会学の研究室を構えて約15年になる。これまでいろいろな研究を行ってきたが、最初の頃、学会などではあまり理解してもらえなかった。発表しても内容に関する議論に至らず、重鎮から「聞いたことがない」の一言で切り捨てられ、悔し泣きをしたこともあった。しかし、めげずに続けていった。「石の上にも3年」どころか15年もかかってしまったが、これまで研究室で、障害理解研究会、実践人間学研究

会、障害児保育実践研究会、アジア障害社会学会などの事務局を引き受けてきたことから福祉社会学が改めて広まってきたことを感じている。

社会学である以上、社会とのかかわりを十分に持ち、研究成果を社会に還元することができる研究を手がけてきたつもりである。もちろん、従来の特殊教育や社会福祉学でも社会に対するアプローチはあるが、それらは学校や地域といった限られた範囲が対象になることが多く、広く一般社会に対する、あるいは一般企業に対する啓発の内容や方法を検討することはほとんどなかった。すなわち、福祉社会学は既存の学問領域の隙間を埋めるものであると言えるか。

どんな研究を行ってきたか

隙間研究として行ったものの中でも、特長的なテーマを紹介しよう。

「女性週刊誌のなかの難病者・障害者」:

一般の女性の障害観等に影響を与える情報源のひとつに女性週刊誌があることを予想してはいたが、大学研究者の多くはそれらを手にしたこともなく、話題にものぼらなかつた。我々は1年間にわたり毎週、女性週刊誌4誌を買い続け、内容の分析を行った。当時の芸能ニュースやはやりの痩せ方などに関する豊富な情報を入手できたという副産物もあったが、成果として、一般家庭の主婦の障害観形成の要因に迫ることができた。

「盲導犬に関する啓発パンフレットの効果」：自治体等で発行している盲導犬理解促進のためのパンフレットが実際にどの程度の効果を持っているのかについて、関東の中規模都市において社会実験を行った。

「一般企業における障害理解に関する研究」：一般企業には障害のある従業員が多くおり、また業種によってはお客さんとして障害者や高齢者を迎えることになる。一般企業においては、障害者の何をどのように、どの程度理解すればよいのかについて、具体的にそれを示した。従業員の研修のためのパンフレットやビデオを作成し、配布した。この研究の成果は接客業界を中心として広く活用されており、「やったあー」という感じである。

「交通バリアフリー研究」：主に国際交

通安全学会のプロジェクト研究として、ここ最近4年間にわたって障害者・高齢者の交通バリアフリー研究に取り組んできた。隙間研究というよりは正面から取り組んだ研究であると言えるかもしれない。特に視覚障害者と車いす使用者に関する問題に力を注いできている。成果として、韓国における国際シンポジウムの開催、日本の中央官庁と交通バリアフリー関連企業をパネリストとしたシンポジウムの開催、障害者の交通安全を守るための提言書の作成と配布、警察庁の交通安全関係部署に対するアドヴァイスと資料提供、いくつかの障害者団体に対するアドヴァイスと資料提供などが挙げられよう。

「アジア諸国・地域の主要駅におけるバリアフリー状況」：日本、中国、韓国、香港、台湾の主要鉄道駅のバリアフリー状況を評価した研究である。調査隊を結成して、現地に赴き、多くの写真を取り、同一の視点で評価をした研究である。この研究は独創性が高い。他に例がない。特に北京駅を対象にしている点がそうである。なぜならば、北京駅舎内は撮影厳禁だからである。知らないということは強いことである。本来、厳しい荷物チェックを受けなければ入れない駅舎であったが、観光客としてうろろしてい

る我々の姿を、通りがかった駅員が目にも留め、好意で別の入り口から入れてくれた。にもかかわらず、いろいろな所へ勝手に入り込み、写真をパチパチ取り、メジャーで測定した。当然であるが騒ぎになり、逮捕されそうになった。追いかけられたので、何が何かわからないまま、学生たちを連れてとにかく逃げた。北京は人が多いので、人込みに紛れて逃げ切ることができた。帰国後、中国の専門家から「公共の場所での写真撮影は犯罪行為。捕まると10日間は解放されない。だから撮った写真は大変貴重である」ということであった。北京駅のものすごい人込みに改めて感謝した。

これ以外に「日本へ乗り入れている航空会社の障害者サービスの実態とニーズ」「幼稚園や学校における障害理解教育」「高齢者の幸せとは何か」「福祉車両の開発とメーカーに対するアドヴァイス」「新聞、テレビニュース、漫画、教科書、絵本における障害者・高齢者」「障害者の困った行為に関する研究」などである。

研究手法はフィールドワークが中心

社会を知るためにはフィールドに出ることが基本である。我々は常にフィールドに出ている。そのフィールドの範囲は

広い。具体的には、幼稚園、保育所、小学校、スイミングスクール、保健所、保健センター、病院、大学、百貨店、スーパーマーケット、書店、ビデオ屋、レストラン、図書館、鉄道駅、地下鉄駅、駅前、空港、船着場、駐車場、盲導犬訓練所などである。

今年度の大きなテーマは「障害者用駐車スペース問題」であったが、日本のほとんどの都道府県の県庁と県庁所在地の市役所をはじめとして、韓国、中国、台湾、香港、ヨーロッパ諸国などの1000箇所以上の駐車場の写真を撮って来ている。我々調査隊はアイズニerlandにも、幕張メッセにも、ユニバーサルスタジオにも、横浜みなとみらいにも、ハウステンボスにも駐車場の調査のために出かけているが、どこも中には入場していないのである。ミッキーマウスに会うこともなく、アウトレットに行くこともなく、スタバでキャラメルフラベチーノを飲むこともなく、一心不乱に駐車場の写真を撮り、数を数え、幅を計り、警備員さんの話を聞き、時には車いすドライバーと共に不正利用者に文句を言い、一緒にピラを配り、それが終われば脇目もふらずに研究室に戻ってデータをまとめるのである。

社会の要請に応える

フィールドを回って、好き勝手にデータを集めているだけではない。その成果を必ず社会に還元することを「研究室のおきて」としている。これは卒業研究や修士論文でも同じである。例えば、上に述べた駐車場研究では、収集したデータは「障害者用駐車スペースの法制化」のためのデータとして警察庁に活用してい

ただく道筋がついているのである。これまではパンフレットやビデオの作成・配布を通して社会に還元したものもあるし、出版の形で世に出したものもある。

今後も社会との関係を重視した視点で、社会に多少とも具体的に還元できる形で、いろいろなテーマに取り組んでいきたいと考えている。

(とくだかつみ 福祉社会学)

